

【研究ノート】

## モンゴル国カザフ人の婚姻儀礼とその変化

廣田 千恵子

**要 旨**：本稿の目的はモンゴル国西部バヤン・ウルギー県に居住するカザフ人の婚姻儀礼について、20 世紀初頭から社会主義体制期を経て現在に至るまでの変化を詳述することである。そのうえで、現在の婚姻儀礼における特徴を示し、人々の行動の選択に関わる社会的背景を明らかにする。

カザフの婚姻儀礼において、全体の流れや規模、贈答品の内容は時代ごとに変化してきた。たとえば、20 世紀初頭、カザフ人の婚約は親同士が決めるものであった。婚姻には異なる出自集団を繋ぐ役割があり、それゆえに婚資は高価なものであった。しかし、社会主義体制期になると、婚約方法や経済状況が変わり、高価な贈答品も交換しなくなった。婚姻儀礼の形態が再び変化したのは、国内の政治・経済体制が一変した 1990 年代以降である。この時期は、各民族の間で自文化に対する意識が高揚した時期でもある。披露宴は大規模化し、新しい行事もおこなわれるようになった。さらに、再び贈答品に対しては、量と質が求められるようになってきている。

こうした儀礼をおこなう上で当事者、とりわけ新郎側にかかる経済的負担は年々増加している。しかし、親族からの助けを得つつもなんとか華美な婚姻儀礼を執りおこなおうとする。人々のそうした行動の背景には、他者とのつながりを重視するカザフの社会的性格が関係している。

**キーワード**：カザフ、モンゴル国、婚姻儀礼、贈与、文化変容

### 1. はじめに

モンゴル国カザフ人の婚姻儀礼に関する先行研究にはビクマルやシナイなど同地域のカザフ人歴史・民族学者によるものがある (Бикүмар 2013; Шынай 2011)。その内容は婚姻儀礼の全体的な流れ、新郎新婦の行動作法、婚礼時に読み上げる祝詞などについてである。

しかし、今日の婚姻儀礼の流れは 20 世紀初頭から大きく変容している。そのことは、現在の結婚披露宴における司会や音楽演奏の担い手の行動とカザフ民族音楽の変容との関係について論じた八木の論文にも示されている (Yagi 2020)。同論には、バヤン・ウルギー県のカザフ人の披露宴が 2000 年以降、県の中心部と、地方の各世帯でおこなわれるものに分かれており、とりわけ前者の披露宴は大規模なものとなっていることが示されている。ただし、八木の論文を含め、先行研究においては婚姻儀礼全体が現在に至るまでどのような変化を経ているのか、その詳細については記述されてこなかった。

以上の研究状況を踏まえ、本稿ではモンゴル国西部バヤン・ウルギー県のカザフ人を事例として<sup>1</sup>、20 世紀初頭、社会主義体制期、1990 年代の民主化以降の現在という 3 つの時代区分ごとの婚姻儀礼の一般的な流れについて、文献と現地調査の記録をもとに詳述し、その上でその変化の具体的内容を明らかにする。

### 2. 調査概要

#### 2-1. 調査対象：モンゴル国カザフ人

現在、カザフ人はモンゴル国内に約 11 万人居住している (2018 年調べ)。カザフ人人口

は同国人口の約4～5パーセントにあたり、国内の少数民族の最大数を占めている。

## 2-2. 調査地：バヤン・ウルギー県

### (1) 地理

モンゴル国内における主なカザフ人居住地は西部バヤン・ウルギー県、ホブド県、首都ウランバートル市とその近郊のナライハ市である。なかでも、バヤン・ウルギー県には国内のカザフ人人口の約8割が集中している。

バヤン・ウルギー県は首都ウランバートルから西へ1,700kmほど離れた国内最西端に位置する（図1）。県の北部はロシア連邦と、南部は中国と隣接し、西部はカザフスタンと近接している。県内の行政区は都市部のウルギー市と地方部の12郡に分かれている。

### (2) 歴史・社会

バヤン・ウルギー県はモンゴル社会主義人民共和国において、1940年に成立した。

同県は成立以降1992年まで社会主義体制下におかれていた。なかでも、1960年代から1980年代にかけては、産業・インフラが目覚ましく発展するなど、社会経済的に安定していた（島村・八木2013:91-92）。この当時より現在に至るまで、同県の主な生業は牧畜である。ただし、社会主義体制期においては国内の他の地域同様に、家畜はネグデルとよばれる牧畜生産共同組合の共有家畜として一括管理されており、私有家畜には所有できる総頭数に制限が設けられていた（風戸2009:201）。

1990年代に入ると民主化および市場経済体制への移行といった体制転換が起こり、国内は社会経済的に混乱した。ネグデルも解散し、家畜は分配され、再び私有化されるようになった。同じ頃、国内における民族アイデンティティの表出と共に、民族文化の復興や習慣を重んじる傾向が強まった。カザフ人もまた、イスラームに関連する行事を復活させる、鷹狩文化や装飾文化などの文化的特徴を国内外に示すなど、伝統文化への意識を高めていった（バトトルガ2007; 相馬2018; 廣田2019ほか）。

体制移行に伴う社会的混乱は2000年頃から徐々に安定を取り戻した。社会インフラ設備も整い、食料や衣服、日用品などあらゆる物が県外から入ってくるようになった。人の往来も盛んになった。同県のカザフ人が国内の大都市や海外に出稼ぎや留学に行くようになり、反対に同県を訪れる海外からの観光客も増加した。

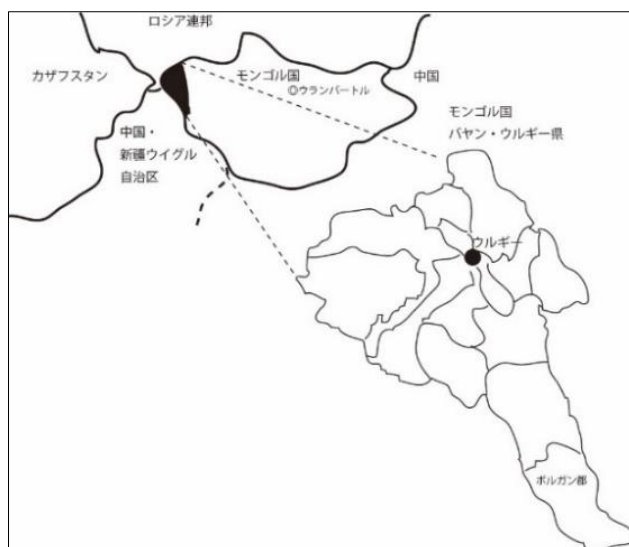


図1 モンゴル国バヤン・ウルギー県位置

モンゴル国縮尺：1:100,000,000

バヤン・ウルギー県縮尺：1:8,600,000（図上が北）

一方で、各世帯の経済状況は未だ一様ではない。現在、同県の人口の約4割が牧畜を専業としているが、彼らの収入は自然環境や中国との畜産物の取引の状況によって激減することもある。カザフ人は経済上の不安定な部分を、親族同士の相互扶助ネットワークによって補う。たとえば、子供の進学や結婚の際に不足している資金を親族に工面してもらい、就職の際に口を利いてもらう、さらには日用品の物々交換や移手段の貸し出しに至るまで、親族間の関わり合いはあらゆる場面で確認される。

このように社会的に他者への依存度が高いゆえに、カザフ人は周囲の人に対して「恥」をかくことを嫌う（廣田 2020a: 68-85）。カザフ語で恥を「オヤット (uyat) <sup>2</sup>」という。「オヤット」に当たる行動は多岐に渡るが、社会的・文化的な行動規範から外れた時や周囲の期待に応えられないこともそれに該当する。他者からの評価を意識するあまり、身の丈を超えた高価な贈答品を贈るようなこともしばしばおこなわれており、社会的規範から外れることに対して彼らが強い抵抗感を抱いている様子が見られる（Werner 1999: 47-72）。

### 2-3. 調査期間・方法

バヤン・ウルギー県における現地調査は2012年～2014年にかけてカザフ人世帯にて住み込みでおこなったほか、2015年～2019年にかけて毎年短期滞在を繰り返している。

婚姻儀礼については聞き取りおよび参与観察を通じて記録した。聞き取りは同県内に居住する30代～70代のカザフ人男女数名に対しておこなった。結婚披露宴は2018年8月にウルギー市で、持参財贈与は2019年6月に県の最南端に位置するボルガン郡で観察した。

## 3. カザフの婚姻

### 3-1. 家族・親族構成

中央ユーラシア社会の家族形態は、伝統的に家父長制が主流であるとされてきた。現在のカザフ人社会においても家族は男性を家長とし、その妻と子の二世帯、あるいは夫の両親を含めた三世帯によって構成されている（藤本 2020: 68）。以下では、主にバヤン・ウルギー県のカザフ人が使うカザフ語をもとに、カザフの家族および親族構成について述べる。

カザフ語で家族をオトバス (otbasi) という。自己からみて父をアケ (ake)、母をシェシェ (sheshe) という。また、同じ父母から産まれた兄弟姉妹のことを、総じて「トガン・アガイन्दル (tuwgan againdar)」という。

カザフ人にとって親族とは狭義には同じ父系の出自をもつ人々を指し、それを軸として親族と姻戚を分類している。自己の父系親族とその配偶者（以下、父方親族）のことをカザフ語でトアス (tuwas) <sup>3</sup> という。他方、母の父系親族とその配偶者（以下、母方親族）のことをカザフ語でナガシュ (nagash) あるいはナガシュタル (nagashtar) という。

さらに、自己からみて父系7世代までに共通の祖先がいる人は、同じ父系出自集団に属しているとみなされる。この父系出自集団のことをルウ (ruw)、あるいはスイェク (suiek) <sup>4</sup> という。出自集団名はそれぞれ祖先の名を冠してよばれる。カザフ人の中では同じ父系出自集団に属する人を配偶者とするできないという外婚制の規則がある。この婚姻タブーは現在でも強く意識されており、男女が出会う際には必ずお互いの出自集団を確認する。女性の出自集団は結婚後も変更されない。つまり、カザフ人にとって婚姻は新たな社会的ネットワークの構築を意味しており、女性は婚姻をつうじて2つの集団の関係を結ぶ

役割を果たしている。

婚姻関係を結んだ自己からみて妻（あるいは夫）の父系親族とその配偶者のことは、カイウン・ジュルト (qaiin jwurt) という。また、自己の父方親族からみて、その配偶者の父方親族のことをクダ (quda)、あるいはクダラル (qudalar) という。

カザフ人が婚姻を結ぶ際、婚姻儀礼の中で父系親族、とくに父の兄弟とその配偶者、自分の兄とその配偶者、父方の平行イトコとその配偶者が果たす役割は大きい。アガ (aga) と呼ばれる自己より年上の男性は新郎新婦の父の代わりにその父系親族の代表として行動することがある。また、ジェング (jenge) と呼ばれる兄嫁は新郎新婦の母の代わりや介添えとして行動する。

### 3-2. 婚姻儀礼の流れ：20世紀初頭

はじめに、20世紀初頭におけるカザフの婚姻儀礼について、1940年代生まれのカザフ人男性から彼の両親の時代の様子について聞き取りした記録と、カザフ人歴史学研究者であるビクマルの記述 (Бикұмар 2013) をもとに明らかとなった範囲で記述する。

#### (1) 婚約

20世紀初頭のカザフの婚姻では親が結婚相手を決めていた。子ができる前から親同士がお互いの子を結婚させることを約束することもあれば、生まれたばかりの子の結婚を決めることもあった (Бикұмар 2013: 63)。新郎となる男性の父は新婦となる女性の右肩にウク (uki) というミミズクの羽で作ったお守りをつけた。これをつけることで邪悪なものから守り、周囲の間人もその女性が婚約関係にあることを理解した。

子が婚礼を挙げる歳になると、両家はキット (kiit) という贈物を贈り合った。この贈り物は「婚姻関係の印」(Бикұмар 2013: 67) であるとされた。その内容は、たいてい毛皮などを使って仕立てた服や、織物、絨毯など高価なものであった。そのほか、新郎父は新婦両親に対して婚資として家畜を贈った。これをカルン・マル (qalin mal) という (Бикұмар 2013: 68)。家畜は新郎側の経済状況に応じて可能な限り納めるものとされていた。さらに、婚資とは別に、新婦を育てた労をねぎらい新婦母へ家畜が贈られた。

婚資を払い終わると、新郎が新婦父のもとを訪れることが許され、正式に婚礼の日取りが決められた。新郎側は婚礼の前に新郎新婦が暮らす天幕型住居を用意した。一方、新婦側も新郎新婦が使用する天幕型住居と持参財一式を用意した。

#### (2) 婚礼

婚礼の日、新郎は新婦を迎えるため5~6人の友人たちと共に新婦生家を訪問する。新婦側は天幕型住居を建てて、新郎を迎え入れる。天幕型住居の中で新郎と新婦が初めて顔合わせをして、婚礼を挙げるか否かを決める。婚礼を挙げる場合は、新婦生家は娘の結婚を祝い、祝宴を催す。この祝宴は数日に及んでおこなわれたという。祝宴の出席者は主に新婦親族<sup>5</sup>であった。その後、新婦は母親と数名の近親者、新郎たちと共に、ジャサオ (jasauw) という持参財を載せたラクダを引きながら新郎生家に向かう。このように新婦が新郎生家へと嫁ぐことを、クズ・ウザトウ (qiz uzatuw) という (Бикұмар 2013: 72)。

新郎生家に到着すると、今度は新郎両親が新郎親族へ新婦をお披露目する祝宴を執りお

こなつた。この祝宴をケレン・トゥセロウ (kelen tuseruw) といい、「嫁を迎え入れること」を意味した (Бикүмар 2013: 74-75)。新婦がベールをかぶつて顔を隠したまま介添えと共に新郎生家に入ると、人々は乳製品やバオルサック (bauwirsak) という小麦粉を揚げた食べ物をして祝福をした。この行為には、歡びを皆で分け合う意味も含まれている。

出席者の中で民族楽器ドムブラを演奏する人がそのドムブラで新婦のベールを半分あげた。このベールを外す行為をベタシャル (betashar) という。新婦はそのまま年長者に挨拶をしてまわつた。宴は数日にかけておこなわれ、競馬や相撲などの競技もおこなわれた。

### 3-3. 婚姻儀礼の流れ：社会主義体制期

次いで、社会主義体制期における婚姻儀礼の流れを概観する。この時代の様子については、1970年代および80年代に結婚したカザフ人への聞き取りの記録をもとに記述した。

#### (1) 婚約

1940年代以降、社会主義体制下に置かれると、婚礼に至るまでの過程に変化が起こつた。ソ連の影響を受けたカザフスタンにおいて親が子の結婚を決める習慣や婚資を贈る習慣が身売りとして批判されたように (藤本 2015: 179)、バヤン・ウルギー県のカザフ人社会においても子自身が選んだ相手と婚約するほうがよいと考えられるようになっていった。

ただし、当時のカザフ人にとって、未婚の男女が直接顔を合わせて交流することは、社会的に好ましくない行為であり、恥ずかしいことであるとみなされていた。そのため、男女は主に文通によって交流を深めていたという。

1970年代に結婚した女性からの聞き取りによると、彼女が結婚した頃にはアラップ・カショウ (alip qashuw) という新しい形式の婚約方法が流行していた。これは直訳すると「(嫁を) 取つて逃げる」という意味である。

新郎となる男性は新婦となる女性の両親から許可を得ずに、女性を連れ去り嫁入りさせた。ただし、実際には女性は予め自分の両親に結婚を考えている相手の話をしていて、両家の間に暗黙の了解があるケースが多かつた。女性を連れ去つた後に、男性父が正式に結婚の許可を得るために女性両親のもとへ赴いた。その際、男性父はかぶっていた帽子を女性両親の足元に落として、相手を尊重する意志を示した。この行為を「足元に倒される」ことを意味するアヤクカ・ジャグロウ (ayaqqa jagaluw) といった。

#### (2) 婚礼

結婚の許しを得てすぐ、新郎生家では新郎親族を招いて新婦を迎え入れることを祝う宴を開いた。この祝宴をティレオ (tileuw) という。ティレオとは「祈る、願う」を意味し、慶事において人々が幸せな状況になることを願つて催される祝宴全般を指す。出席者はトゥインシェク (tuinshek) という小さな布で包んだ手土産を必ず持参した。その中身は、たいてい乳製品とバオルサックであつた。

祝宴は新郎両親の天幕型住居でおこなわれた。新婦が天幕型住居内に入ると、年配の女性が乳製品やバオルサック、砂糖などをばら撒いて祝福した。宴が始まると民族楽器ドムブラの演奏者がドムブラで新婦のベールを外す。新婦はベールを外された後、再びベールで顔を隠し、披露宴が終わるまで顔を隠して下をむいていなければならなかつた。新婦が

ベールを外して顔を晒す、あるいは他の参加者の顔を見ることは恥ずべきことであった。宴では集まった人同士で茶を飲み交わしながら、新郎が屠ったヒツジ1頭を分け合って食した。裕福な家では競馬や相撲などの競技もおこなったという。宴はたいてい夕方から始められて、夜が明けるまでおこなわれた。

### (3) 婚資贈与

新婦を迎え入れてから1~2週間後、新郎と兄は婚資をもって新婦親族のもとを訪問した。これは、新郎と新婦親族が初めて交流する重要な機会であった。新郎は新婦両親、既に婚出した新婦の兄姉、新婦親族の家を訪問した。

新郎側が持参するものは、新婦両親に贈るジェテク・アト (jetek at) という引馬1頭とダスタルカン (dastarqan) という食べ物一式、および新婦両親と親族に贈るコルジュン (qorjin) という贈物であった。

引馬は新婦の価値を示すものとしてみなされ、3歳以上のウマが選ばれた。ダスタルカンとは「テーブルクロス」を意味し、布で包まれた食べ物一式を指していたが、転じて客人に振る舞われる食事そのものを指す言葉として使用されている。その中身は、煮込んだ羊肉、バター、チーズ、馬乳酒などの乳製品、バオルサックである。これらは祝宴や茶会の際には必ず用意すべきものと考えられている。

コルジュンとは「鞆袋」を意味する言葉であるが、ここでは袋の中に入っている贈物全てを指す。その中身は衣類や、上着を作るための布、帽子などである。中身を準備する際は、親族が新しい衣服を持ち寄って可能な限り助ける。この贈物は両家の良好な関係を築いていくためのものとして重要な意味をもち、訪問する全ての世帯分用意された。贈物はその場ですぐ開けられて、集まった人の前でその中身と質が披露、検分される。この贈物に対しては必ず返礼が求められた。ただし、返礼の量と質は受け取ったもの以下でよい。新婦側は新郎から贈物を受け取ると、それぞれ羊を屠ってもてなし、返礼を渡した。

### (4) 茶会

婚資を贈った後、新郎両親は新婦親族との交流を深めるため茶会を催す。この茶会のことをクダ・チャイ (quda shaik) という。この茶会には新郎新婦のほか、両家親族が全員参加する。新郎両親は食事を用意し、客人をもてなす。新郎側が茶会を開いた後日、新婦両親も返礼として茶会を開く。なお、客人は必ず手土産を持参し、茶会の開催を助ける。

### (5) 持参財贈与

連れ去り婚が主流になった頃から、婚資と持参財の贈与および分家は婚礼を挙げた後におこなわれるようになった。持参財を贈る儀礼をトゥセク・オロン (tusek oron) という。この言葉は「寝具一式」を意味している。持参財の贈与儀礼は両家の経済的状況を鑑みて、贈物とその返礼の準備が整ったときにおこなわれる。

儀礼をおこなう場所は新郎生家である。新婦父の兄と新婦母が持参財を新郎生家に届ける。出席者は新郎の家族と親族である。新婦側の到着を祝福して天幕型住居の中に迎え入れられると、はじめに新婦側が持参した食べ物一式を出席者全員で食べ合う。その後、新婦両親が新婦のために用意した家財道具などの持参財を人々の前で披露する。

1983年に結婚した女性が受け取った持参財は、ベッドや布団など寝具一式、ミシン、食器棚と食器一式、調理器具一式、長持ち、フェルト敷物、布製の壁掛け、防砂壁、毛皮コートやワンピースといった衣服一式、葬儀の際に遺体を包む白い布などであった。新郎へは銀細工がほどこされた鞍が贈られた。

この儀礼では新婦両親からのコルジュンとして、新郎父へ上着が、新郎母へワンピースが、さらに新郎両親の兄弟に向けても服や服を作るための布が贈られた。

くわえて、新婦両親からのキットとして、新郎父と新郎父の兄弟姉妹、新郎母の兄弟に、フェルトの敷物スルマック (sirmaq) が贈られた。この頃からキットという言葉は高価な贈物全般ではなく、新婦側から新郎側へ贈るフェルト敷物を指した。キットは新婦側から新郎側への尊敬の念を示すための贈り物であり、返礼は求めないという。ただし、実際には敷物を準備した新郎母の労をねぎらい新郎側から家畜が贈られた。キットとしてフェルト敷物か絨毯を受け取った人のうち、新郎父は新婦母に対して成畜ウシ<sup>6</sup>か、生活に余裕がある場合はラクダやウマを贈ったという。また、新婦より年下の甥、姪のうち誰かひとりに対して2歳ウシを贈る。そのほかの新郎親族は新婦母に対して主に2歳ウシを贈った。

贈物の贈呈が終わると、新郎側が用意した食事を出席者全員でとる。その後、新郎親族は各自の家に帰り、新婦父の兄と母を招いて彼らに食事をふるまってもてなす。コルジュンを受け取った新郎側の人々はその返礼として、新婦両親に対してそれぞれ衣服を贈った。

## (6) 分家

新郎両親は新郎新婦の新居を用意する。新郎新婦の新たな家を建てる儀礼をオタオ・クテロウ (otauw koteruw)、あるいはシャナラク・クテロウ (shaniraq koteruw) という。前者は「分家を建てる」、後者は「天窓を持ち上げる」という意味である。

分家には新郎新婦とその両親、新郎と新婦の親族、近所の人々や友人が集まり、新しい天幕型住居が建てられた。住居の天窓は新郎か年配の男性が持ち上げた。年配の男性が持ち上げる理由は、その人のように長生きして家族が繁栄するようにと願うためであった。

分家の際には、新郎父から新郎へエンシ・マル (enshi mal) という分与財産としての家畜と、新郎新婦の新婚生活に必要な家財道具が贈られた。家財道具にはベッドや寝具一式、食器棚、長持ち、敷物などが含まれる。近所の人々や友人はそれぞれ茶を淹れるためのやかんや器など、新郎新婦の新生活に必要な道具を持ち寄った。集まった人々は、新郎両親が用意したダスタルカンを食べ語りながら、新郎新婦の新たな門出を祝った。

## 3-4. 婚姻儀礼の流れ：体制移行期から現在まで

1990年代以降の一般的な婚姻儀礼の流れについて1990年代と2010年代に結婚したカザフ人からの聞き取りと、都市部・地方部における参与観察の記録を総じて詳述する。

### (1) 婚約

1990年代初めに体制が移行した当初には、社会主義体制期における婚約方法が引き続きおこなわれていたが、2000年代以降は、サルガ・タゴウ (sirga taguw) という婚約儀礼がおこなわれるようになった。「イヤリングをつける」ことを意味するこの儀礼では、新郎側が新婦両親に結婚の許しを請うために、いわゆる結納品を贈る。

この儀礼では新郎側から新郎本人、新郎父あるいは父の兄、兄嫁、新郎友人が訪問する。結納品として新婦へ金のイヤリングが、新婦両親へフェルト敷物か既製の絨毯と、コルジュン、食べ物一式が贈られる。コルジュンの中身は上着とそれを作るためのシルク布、シーツなどの寝具、スカーフである。イヤリングと敷物に対する返礼は求められない。

新婦側の出席者は新婦と新婦両親とその家族、新婦親族である。出席者が集まりしばし歓談した後、新郎父が新婦両親に「娘さんをもらっていいですか」と許可を求める。新婦両親が承諾すると、新郎父が「娘さんを見せてください」と尋ね、新婦が兄嫁2名に連れられて新郎たちの前に現れる。新郎父は新婦を連れてきた兄嫁それぞれに対してクリムディック (korimdik) という謝金を 20,000 トウグルク (約 800 円) ほど渡す。

新郎側が持参した食べ物を出席者全員で食したのち、その後新婦側も食事をふるまう。全て食べ終わった後、新婦側は用意していた持ち帰り用の食べ物一式と、新郎両親から受け取ったコルジュンの返礼として衣服を贈り、これを以て婚約が結ばれたこととなる。新郎たちは持ち帰った食べ物を新郎生家に集まった新郎親族と共に食す。

## (2) 婚礼・結婚披露宴

婚約儀礼を経て婚礼を挙げるようになると、婚礼当日に新郎側が新婦を迎えに行くクズ・ウザトウが再びおこなわれるようになった。

婚礼当日、新郎、新郎父の兄、兄嫁、新郎友人1名は新婦を迎えるため新婦生家を訪問する。その際、新郎両親は新婦両親に対して新婦の価値を示すものとして引馬あるいは馬と同額のお金を用意する。そのほか、新婦両親とその家族、新婦親族の各世帯の家族へ用意した衣服の贈物を持参する。新婦側で衣服を受け取る人は、返礼を用意しておく。両家が揃ったところで、両家が準備した食べ物をそれぞれ食し、贈答品を贈与する。

新婦の所属が正式に新郎側に移った後、続けて新婦両親が新郎両親と親族を招いて茶会クダ・チャイを開く。新婦主催の茶会は、以前は新郎主催の茶会の後におこなわれていたが、新婦生家に人が集まっているときにおこなう方が効率的と考えられるようになった。茶会を終えてから一同は披露宴会場へと移動する。

結婚披露宴はウイレノウ・トイ (uilenuw toi) という。民主化以降、地方部の披露宴は従来どおり新郎生家の天幕型住居でおこなわれているが、都市部であるウルギー市や地方部の余裕のある世帯ではレストランや宴会場にておこなうようになった (Yagi 2020: 543-544)。宴会場での披露宴は、とくに 1990 年代末頃から盛んとなった。

婚姻儀礼のなかで、結婚披露宴には最も多くの人が集まる。出席者は新郎新婦、新郎新婦の両親とその家族、新郎新婦の親族全員、新郎新婦の友人である。披露宴の出席者には、事前に招待状が配られる。

新郎新婦は披露宴会場に向かう前に、モスクに赴きクルアーンの朗誦をおこなう人であるモルダ (morda) に結婚の許しを請う。披露宴会場に着くと、新郎は友人を、新婦は兄嫁と友人を介添えとして入場する。式の進行は民族音楽の演奏者であるタマダ (tamada) がおこなう (Yagi 2020: 546)。会場には新郎新婦を迎える曲が流される。かつてはドンブラ演奏者によって外されていた新婦のベールは、新郎母がドンブラを使って外すようになった (写真 1)。その際、新郎母は新婦の右肩にミミズクの羽をつける。

さらに、その場で新郎両親は新婦両親と、新婦父の兄弟と新婦母の兄弟への贈物として



上着を贈呈する（写真2）。これをシャパン・ジャボウ（shapan jabouw）という。用意される上着は、民族衣装や、革のジャケット、カシミアのコートなどである。くわえて、介添えにはアクセサリを贈呈する。この贈物に対する新婦側からの返礼は用意されない。



（左）写真1 披露宴で新郎母にベールを外される新婦

（右）写真2 新郎両親から上着を贈られた新婦両親

（中央が新婦父、その右が新婦母）

（2018年8月バヤン・ウルギー県ウルギー市にて筆者撮影）

その後、新婦はベールを外したまま、集まった人々と食事を囲む。宴では余興をおこないながら、二人の結婚を盛大に祝う。ヒツジは客の人数に合わせて必要な分屠られる。屠る人は新郎でなくてもよい。余興の最中には、新郎親族や新婦両親、友人たちがそれぞれ祝辞を述べながら、新郎両親へ祝儀を贈る。披露宴の参加者は、かつては食べ物を持参したが、現在では祝儀として現金を渡す。新婦両親は50万トゥグルク（約20,000円）ほど用意するが、他の人たちはたいてい世帯ごとに1～5万トゥグルク（約400～2,000円）を新郎新婦との関係の近さに応じて贈る。

そのほか、新郎両親は披露宴までに、新郎新婦の新生活に必要な家財道具と衣服、新婦親族への贈物を用意する。準備できなかった場合は、分家までに用意する。大規模な披露宴と贈物にかかる総額は1～1.5千万トゥグルク（約4～600,000円）にも及ぶという。県内都市部のカザフ人の月ごとの平均現金収入が約50万トゥグルク（当時約30,000万円）

（2012年調べ）であることを考えるとその費用は膨大であることがわかる。しかし、新郎両親はこれらの費用を親族の助けを得る、銀行から借金をするなどしてなんとか工面する。

### （3）茶会

結婚式後、新郎両親は新婦側が開いた茶会への返礼として、新婦両親と親族を招いてクダ・チャイを開く。

さらに、2010年以降、クダ・チャイ以外にもカイトルマ（qaitarma）・トイタルマ（toitarma）という茶会が新たに開かれるようになった。カイトルマは、新郎両親が開く茶会であり、共食する機会をもう一度設けることによってより親密な関係を築いていきたいという意味を示す。他方、トイタルマはカイトルマを開いた新郎側に対する新婦側からの返礼の茶会である。ただし、いずれの茶会の参加者も、新郎新婦の生家の近くに住んでいる親族に限

られる。茶会の出席者は必ず手土産を持参する。

#### (4) 持参財贈与

持参財の贈与儀礼の流れには、社会主義体制期以降大きな変化はないが、贈答品の量は増加し、質も高価なものが求められるようになっている。

新婦父の兄と新婦母は、新郎新婦、新郎両親とその家族、および新郎親族が集まる新郎生家に持参財を届けに行く。儀礼の間では、新婦側が持参した食べ物一式を出席者全員で分け合った後、持参財が披露される（写真3）。

2019年に結婚した女性の持参財は、ベッドや布団など寝具一式、ミシン、食器棚と食器一式、調理器具一式、冷蔵庫、長持ち、スーツケース2～3個、フェルト敷物、絨毯数枚、布製の壁掛け、防砂壁、毛皮コート、ワンピース、カシミアの服などの衣服一式であった。新郎には車、衣服、フェルト敷物が、新郎新婦の子供には衣服と玩具が贈られた。

さらに、コルジュンとして新郎父には上着が、母にはカシミアの衣服が、親族とその家族へは服や服を作るための布が贈られた。キットとしては、新郎父とその兄、新郎母の兄に対してフェルト敷物が、それ以外の新郎父の兄弟全員に既製の絨毯が贈られ、その場で披露された（写真4）。新郎父に贈られたフェルト敷物は、新婦側の新郎側への敬意を示すために、その場ですぐ新郎父の足元に敷かれた。

贈物の贈呈が終わると、新郎両親が用意した食べ物を出席者全員で食して一旦解散する。その後、改めて新婦父の兄と新婦母を新郎親族がそれぞれの自宅に招いてもてなす。

コルジュンを受け取った新郎側の人々はその返礼として新婦両親に対してそれぞれ衣服を贈った。キットを受け取った人は新郎母の労をねぎらい家畜か現金を贈る。具体的には、新郎父は新婦母に対して成畜ウシあるいは現金1,000,000トゥグルク（約40,000円）を、新婦より年下の兄弟姉妹、甥、姪のうち誰かひとりに対して2歳ウシを贈る。そのほかの新郎親族は新婦母に対して受け取った敷物・絨毯の種類に応じて2歳ウシか、仔牛に相当する現金100,000～300,000トゥグルク（約4,000～12,000円）を出す。



写真3 贈られた持参財の披露



写真4 贈られた衣類・敷物の開封

(2019年6月バヤン・ウルギー県ボルガン郡にて筆者撮影)

#### (5) 分家

社会主義体制期と比べてその内容に大きな変化はないが、集まった友人や近所の人々が持参するものは披露宴の時と同程度の現金となった。

## 4. 婚姻儀礼の変化とその背景

### 4-1. 婚約における変化

婚約方法は社会主義体制期前後で大きく変化している。カザフ人同士の結婚において、結婚相手は親が決めるものであったが、社会主義体制期以降は社会的価値観の変化に応じて次第に子自身によって婚約者が選ばれるようになった。1970年代には既に連れ去り婚が一般的となり、婚約を省いて婚礼を挙げるようになっていた。

他方、1990年代以降はかえって形式を重視するようになってきている。2000年代以降は、婚約時に婚資と結納品の贈与もおこなわれている。高価な品物を持って交渉に行く様子は、かつて婚礼前に婚資を贈って結婚の許しを得ていた頃の習慣を想起させる。これらは1990年代以降、同地域において民族アイデンティティの高揚と共に自文化の習慣を守ることが意識される過程において、新たに形成された儀礼の流れといえよう。

さらに、今日では婚約時に新郎本人も出席するようになってきている。こうした変化には、1990年代以降、若い世代が就学や仕事のために積極的に県外に出ていくようになり、婚前の女性が男性と直接会うことが社会的に恥ではなくなったことが関係している。

### 4-2. 婚資贈与・持参財贈与における変化

新郎側から新婦側へ贈るものは、(a) 嫁の対価としての返礼を求めない婚資と、(b) 両者の良好な関係を築くためのコルジュン<sup>9</sup>という衣類とダスタルカンという食べ物である。

(b)には相手から返礼がある。両者ともに、時代ごとの社会的・経済的状况に応じてその内容が変化しているが、(a)の婚資の変化はとくに著しい。

中国のカザフ人社会において、婚姻は集団内における男性とその家族の経済力を示す契機であり、女性は男性側からの婚資をもって男性側の誠意をみる(ヤコブ・クオ 1996: 106-110)<sup>7</sup>。20世紀初頭のモンゴル国カザフ人社会においても、婚礼を挙げる前に贈られる婚資は、男性側の経済力と相手への誠意を示す上でも重要な意味を持っていた。

しかし、こうした習慣は社会主義体制期にはなくなった。その主な理由は女性の身売りのような状態が非難されたためであるが、計画経済のもとで私有家畜の数が制限されていたことも関係しているだろう。婚資には引馬のみが贈られるようになった。

ところが、1990年代以降は婚約時に敷物を、婚礼時に引馬を、披露宴時に衣服や宝飾品をと、再び多くの婚資を贈るようになった。カザフスタンの都市部アルマティ市のカザフ人の間でも婚約時に高価な贈答品が交換され、姻戚関係の構築・強化がおこなわれているように(斎藤 2018)、ウルギーにおいても県内の居住地域を問わずカシミア、革のコート、金のアクセサリ、車など高価な贈物が贈られている。こうした様子からは今日における婚姻が、再び新郎側の経済力を示すための行事となっていることがわかる。

他方、新婦側から新郎側に渡されるものは、(c) 新郎新婦の新生活に関わる持参財、(d) 持参財と共に贈られるキットというフェルト敷物、(e) コルジュンやダスタルカンといった新郎側からも必ず返礼がある贈物である。

(c)の持参財は20世紀初頭においては娘が嫁ぐ際に持たせていた。しかし、社会主義体制期以降、娘が逃げるように嫁ぐようになったため事前に持たせられなくなり、披露宴後に渡す機会が新たに設けられ、今日でもその習慣が続いている。

3種類の贈物の中でも、とりわけ重要視される贈物が(d)のキットである。キットは絨毯よりもフェルト敷物の方が適切であるといわれている。その理由は、フェルト敷物は表面に必ずカザフ文様がほどこされる(廣田 2017: 141)、フェルト作りから縫製に至るまで技術と知識を要する、来客時には必ず床一面にこの敷物を敷く(廣田 2020b: 70)など、カザフの文化的規範や習慣と密接に関わった敷物であり、カザフ人の間では相手への敬意を示す贈物として認識されているからである。新婦側から新郎側へのフェルト敷物贈与は新郎側が婚約時に贈る絨毯<sup>8</sup>とは異なり、彼らが継承してきた伝統的習慣とみなされている。

新婦母は既製の絨毯ではなくフェルト敷物を贈ることが自身と家族に対する社会的評価に繋がることを理解しているため、時間と労力をかけてでも準備する。キットは複数必要となるため、その準備には新婦の親族も制作面や金銭面において率先して協力する。

キットは新郎側から同様のものが返礼されることはなく、その制作労力に見合った金額が新婦母へ渡される。こうした様子からはキットの贈与が双方の関係性を確認するための行為であることが読み取れる。

なお、新婦側から新郎側へ贈られる贈物のいずれにおいても、量・質ともに社会主義体制期と比較すると増加している。

#### 4-3. 披露宴における変化

結婚披露宴は元々新郎親族に対して、新婦を披露することが目的とし、新郎生家の天幕型住居で新郎親族のみ集まっておこなわれていた。現在では新郎親族に限らず、新婦親族や友人を含む多くの人々が出席している。また、費用さえ工面できれば、生業や居住地に関わらず、レストランや宴会場において大規模な披露宴を催すようになっている。

披露宴中の大きな変化は、新郎両親が新婦親族に対してカシミアあるいは革の上着を贈るようになった点である。これら衣服は嫁の対価として贈られるものであるが、これを披露宴の場で贈ることに男性側の経済力を参加者に示す意図が含まれているといえよう。

披露宴にかかる費用は新郎側の実際の経済力を上回っていることが多い。しかし、披露宴に出席する人々の前で恥をかけないという意識から華美な式を執り行うようになっている。こうした式をおこなう上で、親族からの祝儀は重要な支えとなっている。

そのほか、かつて新婦は披露宴の間、顔をベールで隠し恥じらうものと考えられていたが、今日では一度ベールを外すとそのまま顔を晒した状態で出席するようになっているなど、カザフ人にとっての社会的な恥の基準が変化している様子もうかがえる。

#### 4-4. 茶会における変化

2010年以降、カイトルマとトイトルマという新しい茶会が開かれるようになった。本来的にはクダ・チャイを開けば両家の親睦を深めるという目的は果たせるが、裕福な一部のカザフ人の中で小規模な茶会が繰り返し催されるようになり、徐々に定着していった。

新しい茶会は経済的に余裕がない世帯はおこなわなくて良いと言われているが、新郎側にとっては茶会を開けないほど貧しいと思われたくないという見栄から、新婦側にとっても返礼の義務を怠るということは恥であるという意識から、たいてい催されている。

## 5. おわりに

本稿はモンゴル国バヤン・ウルギー県におけるカザフ人社会を事例として、カザフの婚姻儀礼の時代ごとの流れと変化の様子を詳述した。

20世紀初頭において、カザフの婚姻は異なる出自集団との関係を結び社会的なつながりを構築することを一義的な目的としておこなわれていた。そのことは、婚約相手を親同士が決める、新郎側が多くの婚資を支払うなどの行動に表れていた。婚資には家畜や当時の高価な品々が選ばれ、男性側はこれをもって自身の経済力と誠意を示した。

しかし、社会主義体制期になって新しい社会的価値観が広まると、婚約相手が子自身によって選択されるようになり、婚礼を挙げる方法や、婚資・持参財の贈与のタイミングが変わった。また、当時は計画経済下にあったため、新郎側が婚資に高額をかけることは困難であり、婚資の内容も制限されることとなった。そのため、社会主義体制期における婚姻儀礼はその当時の社会的状況が許す範囲において可能な形態に変わっていった。

1990年代に入り社会体制と経済状況が一変すると、婚姻儀礼のあり方は再び変化した。現在の婚姻儀礼には次のような特徴がみられる。

第1に、民主化以降の民族意識の高揚とともに、伝統に則った儀礼形態をとることが意識されるようになった点である。そうした意識は20世紀初頭におこなわれていた婚約儀礼と婚礼前の嫁の所属の変更儀礼の復活や、文化的習慣と密接に結びついたフェルト敷物を新婦側から新郎側への敬意を示す贈物として選択するなどの行動において読み取れる。

一方で、第2の特徴として、伝統を意識しつつも、1990年代以前までは文化的なタブーとされていた振る舞いに抵抗を感じなくなっている点が指摘できよう。たとえば、婚約交渉において新郎が同席する、披露宴において新婦が顔を晒すなど、かつてのカザフ人が恥として避けていたことが新たな社会的価値観の中では恥ではなくなっている。

そして第3に、市場経済体制への移行と共に経済状況が一変したことで、婚姻儀礼が新郎側の経済力を示すものとして再び機能している点である。とくに、今日の婚姻儀礼は華美で大規模な披露宴や、度重なる茶会の開催、婚資の量の増加と質の向上など、外部からの影響を受けつつ多様化しており、従来以上に新郎側の経済力が求められる場面は多い。

ただし、こうした婚姻儀礼のあり方は必ずしも人々の経済力の現状に見合ったものとはいえない。とりわけ、新郎側は祝儀や借金、贈物の準備における協力など親戚からの助けを得つつも、相当な負担を抱えている。

それにも関わらず、華美な婚姻儀礼が選択される背景には、婚姻儀礼が異なる出自集団間の社会的つながりを構築する行事であることと、同地域のカザフ人社会が今も日常的に他者との相互扶助の関係を重んじる社会であることが関係しているだろう。

婚姻儀礼の当事者とその家族にとって、儀礼に関わるあらゆる行動は新たな社会的つながりとなる姻戚から受ける初めての評価に影響するものである。それゆえに、人々は姻戚の前で恥となるような行動を避けようとしてきた。なかでも、今日においては儀礼の規模と贈物の内容がとくにその評価を左右するものであり、結果として人々は経済的な負担を伴う行動を選択せざるを得ない。彼らのこうした行動は、20世紀初頭や中国のカザフ人社会における婚姻の様相を思い出させるものでもある。

総じて、現在のカザフの婚姻儀礼の形態は伝統的であることを意識しつつも、現代社会における価値観と流行を取り入れて、従来とは異なる新しいものとなっている。他方、今

日、人々が婚姻儀礼において重要視している点に着目すると、社会主義体制期以前のカザフ人社会においてそうであったように、儀礼の規模や婚資の内容を通じて自身の経済力と誠意を周囲に示し、新たなつながりの構築に関わる社会的評価を得ようとしている様子がうかがえる。換言すれば、他者とのつながりを重んじるカザフの社会的性格が、今日においても婚姻儀礼の内容を大きく規定するものとして機能している。

謝辞：本調査研究は、財団法人平和中島財団「平成 24 年度日本人奨学生」（2012～2014 年）、財団法人片倉もとこ記念沙漠文化財団「2016 年度若手研究者助成」（2017 年）、松尾金藏記念奨学基金（2017 年）、日本学術振興会平成 30 年度特別研究員奨励費（研究課題番号 18J12062）（2018～2020 年）、日本学術振興会科学研究費基盤研究 A（研究課題番号 18H03608, 研究代表者：名古屋学院大学・今村薫教授）（2019 年）の助成を受けておこなわれました。関係者の皆様に、衷心より感謝の意を表します。また、モンゴル国での現地調査を支えてくださった皆様、本稿を執筆するにあたりご指導くださった全ての皆様に深く御礼申し上げます。

## 注

- 1 聞き取りによると、モンゴル国カザフ人の中でもホブド県やナライハ市など居住地域が異なると婚姻儀礼の流れには多少の差があるという。本稿ではあくまでもバヤン・ウルギー県でおこなわれている儀礼を事例とし、他地域の状況の把握については今後の課題とする。
- 2 本稿のカザフ語表記は現在モンゴル国で使用されている 1940 年に制定された改良キリル文字カザフ語を、飯沼英三（1994）『カザフ語辞典』ベスト社の表記に従ってローマ字で記す。
- 3 藤本（2020: 70）によると、カザフスタンでは自己の父系親族とその配偶者のことを「オズ・ジュルト」というが、バヤン・ウルギー県のカザフ人はこの単語を使用していない。また、母の父系親族を指す「ナガシュ・ジュルト」という語も、バヤン・ウルギー県のカザフ人の間では「ジュルト」が省略されている。なお、「ジュルト」とは「大衆、人々」、「宿营地」の意である。
- 4 スィェクとはカザフ語で「骨」を意味する。モンゴル国カザフ人の間では、スィェクはルゥと同義語として、ルゥより頻繁に使用されている。
- 5 なお、婚姻儀礼の説明の中で「親族」とは特に言及がない場合、父方と母方のいずれの親族も含まれるものとする。具体的には、自己の父の兄弟姉妹とその家族、母の兄弟姉妹とその家族を指す。
- 6 返礼として選ばれる家畜の性には決まりはない。
- 7 バヤン・ウルギー県において中国新疆ウイグル自治区から嫁いできた女性とその夫親族に対しておこなった聞き取りによると、中国のカザフ人の間では多くの家畜や品物を贈る習慣がヤコブの調査から 20 年以上経過した現在においても継続されている。
- 8 近年、婚約時に新郎側から新婦側へ敷物や絨毯が贈られるが、これは 2000 年以降にカザフスタンのカザフ人の婚姻儀礼を真似ておこなわれるようになった新しい習慣であるといわれている。
- 9 コルジュンが贈られるようになった正確な時代は明らかにできなかった。今後の課題としたい。

## 引用・参考文献一覧

<日本語文献>

風戸真理

2009『現在モンゴル遊牧民の民族誌 ポスト社会主義を生きる』世界思想社、京都。

岸上伸啓 編

2016『贈与論再考 人間はなぜ他者に与えるのか』臨川書店、京都。

斎藤篤

2018「カザフ人の婚姻儀礼の一プロセス「クダルック」についての一考察」『比較文化研究』  
131:143-153.

島村一平・八木風輝

2013「[翻訳]モンゴル国のカザフ人の歴史」滋賀県立大学人間文化 34: 83-95.

相馬拓也

2018『驚使いの民族誌』ナカニシヤ出版、京都。

バトトルガ. S

2007「モンゴルのマイノリティにおける伝統復活とエスニシティ変動—西部地域のカザフとモン  
ゴル系エスニック集団をめぐって—」『共生の文化研究』1:112-125.

廣田千恵子

2017「モンゴル国カザフ人の装飾文化」今村薫編『カザフ人の牧畜文化—ラクダ牧畜、文様と装  
飾—』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 15:87-150.

2019「刺繍壁掛け布「トゥス・キーズ」を手放すとき—モンゴル国カザフ人の未来の選択—」『季  
刊民族学』169: 84-94.

2020a「モンゴル国カザフ人社会における天幕型住居内部への装飾行為の社会的・文化的背景—「恥」  
の概念に着目して—」松尾金藏記念奨学基金編『明日へ翔ぶ5—人文社会学の新視点—』風間  
書房、東京、65-88 頁。

2020b「カザフの仔ヒツジ洗い—毛刈りの前におこなうべきこと」『季刊民族学』172:66-74.

藤本透子

2015「結婚のかたち 恋愛から婚姻儀礼まで」宇山智彦・藤本透子（編）『カザフスタンを知るた  
めの60章』明石書店、東京。

2020「移動する人々のつながり カザフ草原に生きる家族の事例から」山田孝子（編）『人のつな  
がりと世界の行方 コロナ後の縁を考える』英明企画編集、京都、65-80 頁。

モース. M

2008 有地亨（訳）『贈与論 [新装版]』勁草書房、東京。

ヤコブ・ミルザハーン、クオ・ユンフワ

1996「カザフ族」イェン・ルーシェン（主編）・江守五夫（監訳）『中国少数民族の婚姻と家族・  
中巻』第一書房、東京。

吉田世津子

2004『中央アジア農村の親族ネットワーク クルグズスタン・経済移行の人類学的研究』風響社、  
東京。

<英語文献>

Fuki Yagi

2020 Transformation of musical performances at wedding ceremonies in the post-socialist period: the Kazakh tamada in Bayan-Olgii Province, Mongolia, *Central Asian Survey* 39, pp.540-555.

Werner, Ann Cynthia

1999 The Dynamics of feasting and gift exchange in rural Kazakhstan. In Ingvar Svanberg (eds.) *In Contemporary Kazakhs cultural and social perspectives*, CURZON Press, New York, pp.47-72.

<カザフ語文献>

Бикүмар Кәмалашұлы

2013 *Қазақ халқының салт-дәстүрлері*. (カザフ民族の文化習慣) Китаб баспасы. Улаанбаатар.

Шынай Рахметұлы

2011 Салт – сана. (文化習慣) Улаанбаатар.

<モンゴル語文献>

Баянөлгий аймгийн стасистикийн хэлтэс

2019 *Статисткийн эмхэтгэл 2018Он*. (統計集 2018 年) Өлгий хот.

2014 *Статисткийн эмхэтгэл 2013Он*. (統計集 2013 年) Өлгий хот.

(ひろた・ちえこ／千葉大学大学院博士後期課程)